
入水自殺

小 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

入水自殺

【Nコード】

N6029I

【作者名】

小夜

【あらすじ】

啓太は、自殺をすることにした。それを静かに見届ける侑史、あと追い自殺をしようとする征子の、すれ違いの悲しい物語。

（前書き）

第二作になります。

アドバイスをいただければ嬉しいです。

「僕は死のうと思う。世の中にはほんと愛想が尽きた」

庭の竹が、さらさらと音を立てるのが聞こえる。征子は一瞬聞き間違えたかと思った。それほど突拍子もないことだった。

「だが征子は生きてくれ。僕に付き合わせて死なせたら、君の父親に合わせる顔が無い」

「…嫌よ、そんなこと言わないで。啓太さんが死ぬなら私も死ぬわ」

震えながら征子が裾を掴むと、躊躇無く手を振り落とされた。

「どうして…？」

掠れた声で呟き、縋るように見つめると、その痛い視線から逃れるように啓太はおもむろに葉巻に火を付けた。

「もう真つ平なんだ…生きたくない。疲れたんだよ、世俗に塗れて暮らす事に」

啓太は良家の出身で多額の資産があり、家業も軌道に乗りはじめたところだった。金銭的な問題もなく、人望もたいへん厚く人付き合い合いも良好なので、自殺をする原因が全く思い当たらない。

どちらかといえば貧しい家の出身で恵まれなかった征子は、その理由ではとても納得することはできなかった。ようやく手に入れた社長夫人の座から元社長未亡人に地位が落ちるなど、考えるだけで身震いがした。

「征子を任せたぞ、侑史」

うらぶれた場末の居酒屋で、侑史と呼ばれた男は曖昧に頷いた。

啓太から自殺をされると言われた時は慌てて止めたが、決心が固いと知ると諦めた。元より侑史は征子が好きで、啓太を疎ましく感じていた。それを承知した上で啓太は侑史に征子を任せるのだから、おかしい人間である。少なくとも正気ではない。

「でも征子さんはお前と一緒に死ぬと言って聞かないんだろう？」

「ああ、だからこそ侑史に頼んだんだ。ストッパーとしてな」

ウイスキーのロックを舐め、一瞬間を置いてから啓太は言った。

「この後征子と港の倉庫小屋で落ち合って一緒に死ぬと約束してあるから、そこにはお前に行って欲しい。俺は海に行つて死ぬ。そして征子は何を言おうと家まで引きずつて帰つて、どれだけ死にたがつても、決して自殺させないでくれ」

とんでもない頼みだと思った。好きな男を追つて死にたがる女を止める男とは、なんとも滑稽な絵である。

「どれだけ死にたがつても？」

「ああ、どれだけ死にたがつてもだ」

「お前どうしちゃったんだよ。征子さんをあんなに大事にしてただらう？」

「何度も言わせるな。もううんざりなんだよ何もかも。征子だつて、はじめは僕自身を好きなんだと思つていたが大きな勘違いだった、ずっと騙されていた」

早口にまくし立てると、啓太は目に涙を湛えて溜め息を吐き、深く俯く。

「…どういうことだ？」

「あいつは社長夫人の自分が好きなんだ。”僕”じゃなくて”大前啓太取締役”が好きなんだ」

全て合点がいった。啓太は征子の本音に気づき、人生に絶望してしまったのだ。

「僕は肩書き以外何の能のない男だ。だから征子を責められない。力もないし顔も並、歌も歌えないしそれに――」

「自分を卑下するのはやめろ、お前は悪くない」

とうとう堪え切れず、啓太は涙を零した。

「死ぬ必要もない」

「……そうはいかない。侑史ありがとう、最期の時間を過ごせたのがお前とで良かったよ。これからも達者でな」

すぐごとカウンターから立ち上がると、外套を羽織り粋にソフト帽を被り直した啓太を、侑史はそれ以上引き止めなかった。

それから侑史はふわふわとおぼつかない足取りで倉庫小屋へ向かった。たつぷりと辺りを橙に包み込む夕日が、今日はやけに虚しい。

「征子さん」

立て付けの悪い扉を無理矢理開けると、顔色が悪い征子が震えながら振り返った。

「……ゆ、侑史さん？なぜ……」

「彼なら死にました。俺は君を止めに呼ばれた」

「死んだ？彼が、啓太さんが死んだ？」

長い睫毛で縁取られた、大きな瞳が零れ落ちそうになっていた。それを見て侑史はやはり美しい人だと思った。

「啓太は、死にました」

改めてはつきりと告げると、征子はよろめいて床にだらしく座り込んだ。腰が抜けたようだ。

二人は無言のまま、啓太が住んでいた家へ歩を進めた。征子は抵抗をしなかったので、恐らく死ぬ覚悟など元よりできていなかったのだろう。

一週間があつと言う間に過ぎたが、それからの征子を見るも悲惨だった。食事を拒否し日々痩せ衰え、自力であるくのすらままなら

ず、元々白い顔は今石灰石のようで生気がない。侑史は自分の非力を痛感させられた。

「死にたい」

「だめだ」

「死にたい」

「だめです、征子さん」

「死にたいの、もう死なせて、お願い。生きてても意味がないわ、食べないし歩かないなんて死んでるようなものよ」

「だけど…」

「私は貴方のものにはならない」

はっとして顔を見つめると、狂気を孕んだまなざしが侑史を貫いた。

「ずっと前から知ってるのよ。じゃなきゃ私の介護なんてしないわ」

「そんなんじゃない…」

「嘘おつしやい。もう耐えられない…貴方私が好きなら死なせて。」

それが一番の幸せなの」

返す言葉も無かった。侑史ではとてもじゃないがそれ以上止めることができなかった。

それまでの不健康さはどこへやら、ふらふらと征子は部屋を出て行ってしまった。止めなければ征子は死ぬだろう。しかし、本人の意思を無視して無理に生かすことが本当の幸せなのか、もしかすると生かすのはただの侑史のエゴで、死なせてやるのが一番征子にとっては幸せなのではないかと考えると、足は動かなかった。

「侑史！侑史！」

障子が壊れるほどの勢いで開く。休日、しかも早朝なのだから静かに寝ていたい。不機嫌に声から背を向ける。

「侑史！僕だ！啓太だ！」

耳を疑った。啓太は一週間と一日前に入水自殺をしたはずだ。だ

としたらこの声は――？

「聞いてくれ、罵ってくれても構わない。僕は臆病者だ。とうとう自殺できなかった。ずっと海の前で悩み尽くして、怖くなって死ねなかつたんだ。すぐに帰って来たら間抜けだらう？ 恥ずかしくてずっとホテルに泊まってたんだ」

夢であれとこれほど強く願ったことがかつてあつたらうか。いや無かつただろう。侑史は恐る恐る振り返った。

啓太が泣き腫らした目で、あの日と変わらぬ出で立ちで畳にしばらく正座していた。

「征子さんは、昨日自殺した」

蚊の鳴くような声で告げると、啓太はみるみるうちに顔を真っ青にして、ぶるぶると震え始めた。

「と、止めるってあれほど言つたじゃないか……」

「……馬鹿を言うな！ 食事も取らず歩けずやつれて真っ白になつてたんだぞ、止めなくなつてどちらにせよ死んでた。お前はなんてタイミングが悪いんだ……せめて昨日の夕方に帰って来ていたら征子さんは……征子さんは……」

話すうちに啓太は涙と鼻水と涎でまみれた顔をぐちゃぐちゃにして、畳を拳で無茶苦茶に叩きだした。

ついさっきまでは死なせてやるのが一番の幸せだと確信していたが、どうやら不幸だったらしい。侑史は一体これからどうすればいいのか分からず、途方に暮れた。

終

（後書き）

どうだったでしょうか？

客観的に見てどう感じたか、良ければ教えてください。
最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6029i/>

入水自殺

2010年10月8日15時06分発行